

え そえ まご え も ん
江副孫右衛門1個の不良品もだすな！
— 点火プラグ国産化への挑戦 —

江副孫右衛門(1885～1964)
出典：『日本特殊陶業70年史』



点火プラグ第1号
出典：『日本特殊陶業70年史』

■ 生い立ち

江副孫右衛門は、1885(明治18)年、佐賀県西松浦郡有田町上幸平の陶磁器業の父、江副八蔵の長男に生まれた。

江副は、地元の佐賀県立工業学校有田分校を経て、東京高等工業学校(現東京工業大学)に進学、1909年に同校窯業科を卒業して、同年、森村市左衛門の日本陶器合名会社(現ノリタケカンパニーリミテド)へ入社した。1919(大正8)年、日本碍子株式会社に^{びいし}移り、工務部長を経て1939年に同社社長に就任した。

■ 点火プラグ国産化の研究に着手

明治大正期は、すべての発動機に不可欠な点火プラグも全て輸入に頼っていた。江副孫右衛門は、1920(大正9)年、米国の碍子産業の視察に旅立った。チ

ャンピオン社を訪ね、1週間に150万個の点火プラグを生産する工場を見学し、いずれ発展するだろう日本の自動車工業の姿を想像し、国産点火プラグをつくろうと決意した。

江副は日本陶器が、電力事業のみに頼るのではなく、成長するであろう発動機市場の必需品である発火プラグの発展は有望であると考え、会社の事業の多角化による安定に大きく貢献すると確信した。帰国後、欧米からプラグを取り寄せ、数種類のサンプルを分析、点火プラグの製品化の研究を開始した。

1921(大正10)年には、陸軍省に対して、飛行機用爆発磁器管(プラグ)へ試作品を提出し、各試験で高い評価を受けた。しかし、この後、商品化までにはかなりの年月が必要だった。1923年に、社員をプラグ製造技術の研修と工業化の資料を集めるため、アメリカ・チャンピオン社に派遣した。

■ 日本特殊陶業の設立

点火プラグはこれまでの磁器製品とは違い、高い電気絶縁性と機械強度をもち、急冷却に耐える必要があり、寸法精度も厳しかった。江副のリーダーシップの下で、点火プラグの研究、開発、改良は続けられ、海外メーカーとの比較、実用試験を繰り返し、1個の不良品も出さない方針で製品化の道筋をつけた。

その後、プラグの販売に取り組む方針が出され、試作品を自動車会社で実験したところ、問題ないとわかった。

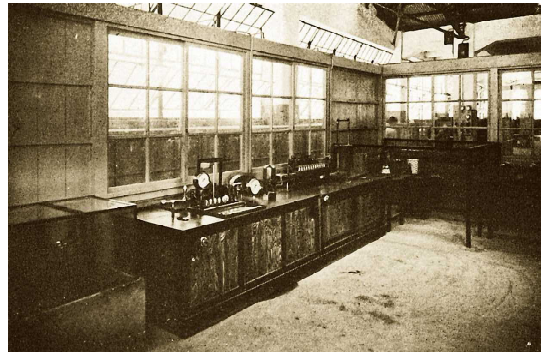


設立時の本社(1937) 出典：『日本特殊陶業70年史』

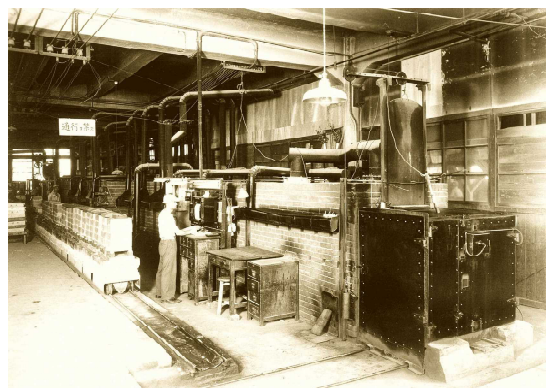
1926(大正15)年当時、日本碍子の点火プラグは、陸軍から自動車用点火栓として完全であると認定された。しかし、不十分な点を自ら発見したために、製品化にさらに4年余りの歳月を要した。

十分一般の用に供することができる製品を生み出した時点で、プラグ部門が独立した。1936(昭和11)年、日本初の点火プラグメーカーである日本特殊陶業が設立され、江副は同社の代表者として就任した。戦後は、故郷に帰り、有田町長を短期間勤めた。

(二宮健壽)



点火プラグの試験室 出典：『日本特殊陶業70年史』



点火プラグの焼成炉 出典：『日本特殊陶業70年史』